歌集

坂道その後

柏木 志津子

はじめに

五十歳の時に、短歌の道に入った母は、昭和四十一年より平成二年までの二十五年間の作品から自選して、平成四年に歌集を刊行しました。歌集名は、母がその後半生を過ごした家が、「勝負坂」という坂道を登りきった高台の上にあることにちなみ、「坂道」とされました。その後も、平成十三年四月に他界するその二ヶ月ほど前まで作歌に勤しんでいました。

この度、母の十三回忌にあたり、「坂道」以後の歌をデジタル歌集として刊行することとしました。

歌集「坂道」については、母が、相当に時間を費やして推敲と選歌を行いましたが、母なき今、私が選歌・推敲することは、必ずしも本人の意に沿ったものとはならない可能性があります。従って、本歌集には、平成三年一月から平成十三年二月までに詠まれ、作歌月から二ヶ月後に、所属していたゆり短歌会の会誌「ゆり」に掲載された毎月七首の短歌を、全て載せることとしました。但し、残された会誌に母が書き込んだ変更については、それを採用しました。また、巻末に「坂道」のあとがきを再掲するとともに、本歌集の表紙には、母が描いた数多くの水彩画の中から、私が選んだものを挿入しました。

平成三年一月～平成五年十二月

音

鳴りいでて盆地の空に余韻ひく除夜の鐘の音　時分ちつつ

蹠（あなうら）　にくず折れてゆく霜柱のかそけき音も聞き止むる朝

淡き彩保ちて枇杷の年越せる花に来て居り目白の声は

ふつふつと飯（いい）炊くる香のかぐわしさ　朝（あした）　目覚むる命のありて

子と孫とゲームにはしゃぐ団欒に難民キャンプの子らの貌顕つ

今少しやさしき声の出でぬかと己が録音厭いつつ聞く

勝負坂一気に上る若者のバイク風切るうれい無き音

（平成三年一月）

きさらぎ

未明の空にとどろく春雷怠惰なわれを打ちて去りたり

渦巻ける葉牡丹三株それぞれの彩にかがやく昨夜（よべ）の雨つゆ

ほつほつと紅梅の花咲き初めぬ　湾岸戦争ひと月を過ぐ

手造りの防空壕にみどり児を抱きておびえし記憶かえり来

わが窓に仰ぐ寒月皓々と砂漠の国の戦禍照らさむ

衰えしまなこ疲るる拾い読みするをいましめ読み進むるに

今日の事も既におぼろとなりて居つ日記書かんとペン執る夜半に

（平成三年二月）

浅　春

単調な鳴き声ゆえに身には沁む雪の朝明(あさけ)の鴉一羽の

春の雪日すがら降らせし鈍色(にびいろ)の空がタべにうす紅を刷く

頂より走る亀裂の幾条の残雪ひかる古りし硬山(ぼたやま)

岩壁のつららにしぶき落下する雪解の水のひびく鳴る滝

立ち直り幾度かさね来しわれか雨は霰となりて花打つ

おだやかに誰ももの云う咲き盛る梅の薫りのただよう苑に

咲き満ちて花静かなる梅苑の蜜吸う目白に時移りゆく

（平成三年三月）

風

老にやさしき時代が来ると信じたし　桜の下道投票に行く

時至り路地の桜のふりこぼす花びら踏みて出で入る幾日

関節の痛みうすらぎたどる丘足裏（あうら）に芽立ちの芝の感触

稜線のやさしくなりし硬山に遠賀川原の菜の花似合う

唐突に訃報は来たる忌憚なき意見をわれに云いくれし友

一花終れば一花開きて咲きのぼる著莪は仏間の淡きひかりに

首飾り作る子白花探す子の無きげんげ田に風遊ぶ

（平成三年四月）

風切羽

残年は素直に生きむさやさやと五月の風に穂波なす麦
執拗にまつわりて来る八重葎（やえむぐら）草刈るわれの疲れ至るに
ことなれる葉の大きさの風うけて音それぞれに庭木揺れ居り
おもむろに重なり合える花弁とく牡丹は描くわれの視線に
わが留守に如何なる事のありたるや風切羽いち枚庭に残して
まろめたる反古がふたたび平面にもどらんとして立つるその音
さりげなく話題をかわす術も身につきて交わるひとりの暮らし

（平成三年五月）

みどり

梅雨の晴れ間の緑の山の龍王の全き姿にわれは安らぐ

溶岩ドーム・火砕流とう語にもなれ火山情報畏れ見つむる

砂漠化の進むバングラデシュと言うわが視野みどりのもり上る時

自問自答しつつ会より帰る道、蕊きっかりと夏椿咲く

浄らなるクルス思わせどくだみは木蔭に真白き十字花かかぐ

干潟に遊ぶやどかりの群　安住の地なくさまよう難民のむれ

鋭(と)き声の近づきて又遠ざかる彷徨うごとき夜のほととぎす

（平成三年六月）

雨　声

朝光（あさかげ）は木立の間よりさし来たり白き睡蓮清きかがやき

一刻も休むことなき木の営為、葉蔭に楓の翼果いろづく

株張らず狂い咲きたるコスモスに容赦もあらずなおそそぐ雨

白昼をわれを閉じ込め降りしきる集中豪雨の家叩く声

こもり居の耳にたしかな蝉の声梅雨しとどなる庭木の闇に

雷雨よけ御堂に憩う巡礼のわれにあまたの仏の慈眼

己が記憶に自信もてざる老となり辞書くる夜半の雨音たかし

（平成三年七月）

確執

排気ガスの間（あわい）ほのかに香りたつえごの並木の白き花群

渋滞にいら立つ車窓えのころ草の穂花やさしく風に揺れいる

丹念に墓石清むる長男の確執絶えぬ父と子なりき

叢を出でしばかりに轢かれたる蛇はおさなき骸をさらす

生き残る金魚を覗くことも無くテレビゲームに夢中なり孫は

網戸にすがるか細き脚よ蟷螂の子が雷鳴に身をふるわする

坂本繁二郎絶筆の月憶わしめ今宵のひかり渾沌とあり

（平成三年八月）

萩

ふっくらと五弁を閉じて紅葵蓉ひと日の命の終焉を遂ぐ

台風が硝子の窓に残したる葉の片々の無作為の絵

径八センチの鉢を己の大地としミニ盆栽は花かかげたり

わが庭の萩咲き初めぬ　七十六になりしを告げむ彼岸の母に

汗にはりつくストッキングを先は脱ぐひと日の緊張とき放つがに

こわばりしふくらはぎをば揉みほぐす今しばらくの歩行恃みて

いねぎわに夜々拭く眼鏡うつしみはあと幾年を世話になるらむ

（平成三年九月）

視野

声にならぬ声上げたらむ台風になぎ倒されしあまた丘木々

意外に浅き根張りの様をさらし居るヒマラヤ杉の倒木多し

支柱もろとも潰えし藤のかたわらに常の表情みせている石

暴風にいたぶられたる萩むらの盛りの花の彩をとどめず

松、桜、樟、泰山木折れし木の一つ香となり燃えて消えゆく

倒木、折れ木片づけられし公園の広くなりたる視野をさびしむ

ほしいままに荒らして去りし台風に疲れ果てたりわれも木草も

（平成三年十月）

初　冬

立冬の一日の日和さだまらず折ふし時雨は山茶花ぬらす

裸木に咲く返り花、返り咲くことなく逝きし人の生涯

ぬばたまのまろ実をあまたかくしもち黄楊（つげ）は小鳥の訪いを待つ

四階の書店に立読む足元を文字を揺らして地震（ない）は過ぎたり

店の鏡の人中にふと見つけたるわが老顔の無表情なる

所在なく立ち来しわれにたわ易く殺されにけり小春日の蠅

徘徊の老い呼ぶ声のうら悲し「日が暮れるのにどこへ行くの」

（平成三年十一月）

聞く

二声三声鳴きいでたりし雀子のまた眠りしか霜のあかとき

思う様に髪まとまらぬ鏡中に昨夜（よべ）の憂いの残るわが貌

ジンジンと鳴りて止まざる右の耳、左の耳はしぐれ聞きいる

まれに逢えば共稼ぎの娘の早口にもの言うをただ頷きて聞く

幾度か歌会に誘（いざな）いくれたりき隣の町の君の死を開く

偲ぶ死者のなべてやさしく年ごとに生き残る身の寂蓼ふかむ

「華著（きゃしゃ）な手がこんなに大きくなりました」開ける十指われにかがやく

（平成三年十二月）

大正生れ

行く年の門辺に立ちて独り聞く除夜の鐘の音己がけじめに

寒天に年越し保つ一輪の薔薇の真紅（しんく）にこころより行く

日溜りに花もつハコベ夫逝きて七草粥を作らず久し

その樹液　紅（くれない）ならずや山茶花の咲きつぎ散りて庭面そめゆく

浮けるものしばし遊ばせ冬の川　ゆっくり行かむわれの晩年

たわ易くテレビドラマに泪出づわが老いいよよ深みゆくなる

なみだ見せしこと無き明治の母と姑、大正生れは泪もろくて

（平成四年一月）

春日

復元なりし豊前国分寺、三重の塔の風鐸春かぜに鳴る

水平線おぼろ弧をなし凪渡る周防灘の春の潮の香

貝原益軒「豊国紀行」に称えたる磯松原の綱敷天満宮

一千本の白梅紅梅下かげにわれを訪う花の香りは

引き潮にのりて遊べる千鳥の声やがて渚の砂に移ろう

海見つつ娘は唐突に言い出づる潮くみ煮炊きせし疎開時を

防波堤・テトラポットつづきたる海岸線は春日にさびし

（平成四年三月）

生き

模糊としているわが夜明け鶯の鳴く音脳裡の襞にひびき来

雨にも負けず風にも負けず地に低く三色すみれの花は咲きつぐ

うかうかと過ごせし花の季 叢(くさむら) のカラスノエンドウ莢実ふくらむ

病み臥せるわれに羨(とも)しも鳴き交わす四十雀(しじゅうから)よ何話しいる

いささかは生気わきくる衰えし眼にあざやかに若葉もゆれば

寝そびれて文読むわれと眠ること無きガーベラの生きの寂けさ

意欲いまだ衰えざりと自負すれどわが身ひとつのこの重たさや

（平成四年四月）

喜寿の記念

人生の折り目・節目をかにかくに越え来て集う喜寿の友がき

杖をつき声かけ合いて登り行く英彦のお山の新緑にぬれ

七十路のわが極限に登り得し奉幣殿まで三百余段

一冊の歌集えにしに頂きし「ゆり」会員の文あたたかし

家事の合間に一点一点友が打ちわが「坂道」の点訳本なる

白紙に小さき影おく点字歌集ー四百五十首わが想い秘め

眼（まなこ）とじ指にふれみる点訳のわれに解（げ）せねどわれの歌集を

（平成四年五月）

初　夏

忽ちに快速過ぐる無人駅　盛りのつつじの紅き残像

新緑の山路こえ来し眼にまぶし臨海地帯ガスタンク群

ばっさりと自毛混じりの髪切りぬ心機一転するにあらねど

長き日のうすずく頃を合歓（ねむ）の花ほのぼの開き葉は眠りゆく

ひとりの食器洗う時の間ほとほとと夜の蛾の窓を叩くその影

ぬばたまの真夜をしき啼く時鳥　逝きにし人を憶いおこせと

どの窓を開けてもみどりある家に住む幸せを思う初夏（はつなつ）

（平成四年六月）

初蝉の声

図書館の書林に入りて読みふける吾に静かな時は過ぎゆく

冷房の会館いで来て真日に照る白き街路にしばしたじろぐ

いつにても決して急ぐことのなき蛞蝓(なめくじ)おのが跡残し行く

老われの原風景に明滅の蛍の影やふるさとの川

いとけなき蹠(あなうら)見せてガラス戸にはり付く守宮の身がまえる影

雨しとどひと日こもりて読みしもの幾許残るや老いし頭悩に

モッコクの小花ほろほろ散るタベ木肌にしみる初蝉の声

（平成四年七月）

サビタの花

道問うと開けし車窓に入り来たる早生（わせ）の稲穂のなつかしき香

山峡の分教場の大時計子らの声なき時きざみいる

人里を離（さか）り来たれる山中に風倒木を運ぶかけ声

思い出のサビタの花は咲きいたり故郷の山路に白くむれ立ち

生けるもの吾と子のみと思うまでこの山頂のしんかんとあり

ふるさとの山に二人で佇ちし日を子は憶うらむわれ亡き後に

みじかきいのち蝉はおしむか街灯のひかり及べる並木々に啼く

（平成四年八月）

声

たかぶれる心なぎゆくアベリアの小花かおれる垣ぞいに来て
自己嫌悪におち入りてわれありし間に無花果あかき口腔ひらく
花盗人となりてほほえむわが友よ老いて惚(ほ)くるは楽しきことか
肉体より意外にもろき精神を友の痴呆にまざまざと見き
女孫(めまご)より敬老の日のプレゼント球根花咲く春まで死ねぬ
ししむらを支えし骨の歳月のながきにちぢみし身長五センチ
宇宙にある人より地球に届く声ひとりの部屋にもひびくその声

（平成四年九月）

うまし名

間引き来し青菜を浮かす今朝の汁さわやかに老の喉（のみど）を下る

この路地に逝きたる人の面影のほのぼのといくつ夕顔ひらく

庭隈に埋めて忘れていしわれに彼岸花すくと伸びて笑えり

孤り行くも寂しくあらず秋の野は熟れし数珠玉掌（て）に鳴らしつつ

風媒の種子は翔ちたり　晩年になお夢持ちてたどる野の道

憶良巡視の遠き代のさま思わしめ嘉麻の郡（こおり）は稲穂垂りたり

嘉麻・穂波・稲築・飯塚うまし名を今にうけつぎ稔り豊けし

（平成四年十月）

高　原

牛の群佇てるも伏すも高原の朝のひかりに向きて静けし

朝光に霜とけゆける草千里　阿蘇のお山は火を噴き止めず

阿蘇五岳（ごかく）ねはんの釈迦のみ姿のさながらにして秋日に鎮もる

高原の寂けさに居て唐突に鳥葬とうを思いていたり

わが画紙におさめん根子岳切り立てる鋭き尾根に鉛筆走る

秋草の殊につつましき吾亦紅（われもこう）はなびら持たぬその花に寄る

囲炉裏火に旅の疲れのほぐれゆき串の山女（やまめ）は香にたちきたる

（平成四年十一月）

小鳥待つ庭

ソマリヤの飢餓ひしひしと身にひびく戦中戦後のひもじさ知れば

戦後を住み四十余年この街の川筋気質にいまだ馴染めず

近づけど車にあわてぬ鳩の群れ歩みて去るを徐行してまつ

ふり返りほほえみ残し雑踏に君まぎれしが最期となりぬ

久し振りに来し子の家のこたつにて聞く庖丁のもの刻む音

あきもせず家計簿をつけ日記書きつつがもあらず一日を終る

小鳥待つ庭とはなりぬ赤き実の千両万両、つげの黒き実

（平成四年十二月）

面影

年の夜の鐘の余韻のきえゆける時空はるかに昂(すばる)きらめく

裸木にぽつんと一つ年越せる木守の柿にさす初日光(かげ)

押し上げし土の間(あわい)につのぐめる球根いくつ声あぐるがに

一対の雛(ひいな)飾れる病室に童女のごとく笑みて在わしき

ほそきみ手に歌集渡せばわが名前しかと呼びたる刀自のその声

時雨の音に覚めては憶う逝きませる面影それぞれに導き給びし

一切を霧つつみたる雨後の朝　盆地の街も安らう如し

（平成五年一月）

ふるさとの山

春一番に並木さわ立つ街空を雲ひと方に流るる速し

何にほほえみ居たりし夫か明け方の夢また思う沈丁に寄り

天窓を一片の雲のぞき過ぐ血圧高き仰臥（ぎょうが）のわれを

義姉の葬りにいま県境の川渡るあと幾度を帰る故郷か

老い病みて小さくなれる亡骸の柩にみたす黄菊白菊

他人の看板かかるを見て過ぐ兄は亡く義姉も逝きたる古里の店

真向えば父母の如くにやさしくて時にきびしきふるさとの山

（平成五年二月）

花菜漬

たゆたいつつ遊びのごとき雪片の地に近づきてくだれる速し

冬眠より覚めよと呼べる鶯か朝のひかりの透る疎林に

円形のレース編とも直土（ひたつち）にナズナ萌えいで描く葉模様

走ること叶わぬ身となり折りからの氷雨に面（おも）を濡らして帰る

おく餌を貪欲に食むひよ鳥のわれに馴染まず逃げ行く迅し

硬山はやさしく老いぬ　見つつ渡る遠賀川原は菜の花のとき

露ながら摘みし花菜の即席漬によべの憂いを忘れていたり

（平成五年三月）

春　寒

たゆとうて高くは飛ばぬ初蝶をれんぎょう垣に見失いたり

ブラジルみやげ蝶の翅もてなれる絵よあまたの骸われに見えくる

気まぐれな三月の空　熱戦の甲子園球場おり折り吹雪く

薔薇よりも蘭よりもわが惹かるるは勿忘草のいと小さき花

今宵また鍋こがしたり嗅覚のかかる衰え思いみざりき

「母をさがしています」と掲載の老女の写真人事ならず

花冷えにまた取り出でて着る和服に老の心もいつかなごみていたり

（平成五年四月）

ただ今

己が身にかまけて過ぎし去年よりぞ(こぞ)楓一樹は遂に芽吹かず

山つつじ朱に咲きいでぬ林より共に掘り来て植えしおもかげ

つばなひかる野路に足曳くわがかたえ燕一瞬ぬきて消えたる

青葉の風にあおられ上り来し丘にブランコたちはひとり遊びす

子猿のごと木によじ登りぶら下り遊びし子らは何処に行きし

子らの居ぬ螺旋すべり台つつぬけに霞の空へ消えゆく幻影

「ただ今」と帰りくる子等われにあり住み古りし家の格子戸みがく

（平成五年五月）

夏つばき

散歩路に立話せし老人の笑顔に久しく逢わず夏来ぬ

おのずからまろく樹形を作りゆくモッコクの木に小鳥ら憩う

林間に箒の音のしていしが春の落葉を燃(も)す香のあわし

絶えまなく噴水しぶく描き分けん木々の緑にわが迷う間を

しばしばも小窓をのぞく色づきし枇杷の実たたくはげしき雨に

うす紅の狭庭の薔薇も散りいむと夜来の雨を聞きつつまどろむ

梢うれに真白き五弁花　炎帝に捧ぐるごとく夏つばき咲く

（平成五年六月）

ながき梅雨

すがすがと青き実あまたはぐくめり剪定せんと寄る黄楊（つげ）の木は

曇天に声あぐるがに若竹の秀先（ほさき）きそいて伸びゆく羨（とも）し

紅の合歓（ねむ）の刷毛（はけ）花やわらかに立ちなおりゆく梅雨の晴れ間を

書読みつつ時に居眠る雨の日も刻くればわくわくわれの食欲

拡大鏡もて文を読む円形に入り来し蟻は脚早に去る

風雨猛る夜はきれぎれの夢に覚む崖の上なる古家にひとり

梅雨ながく盆地囲える山々を幾日とざして鈍色の空

（平成五年七月）

若きおもかげ

蝶が来て蜂きて芙蓉の蜜を吸う争うことなきものに時過ぐ

ゲームソフトに列なす人ら食料を得んと並びし戦後を知らず

疲れて帰るすずめいろ時点々と待宵草は黄花かかぐる

墓参に急ぐ車窓に見えず古里の求菩提（くぼて）の山は雨雲の中

黙とうの一分間に顕ちきたる戦火に果てし若きおもかげ

雨多く降りてこのまま逝く夏か霊送る夜のほそき虫の音

白然破壊なおも続くる人間に天の怒りか異常気象は

（平成五年八月）

彼岸花

台風に葉を失いし桜木に蝉も小鳥も今朝は来たらず

舗装路をたたきてはぬる雨脚の静まるを待つガラス戸越しに

「孤食」という言葉を知りぬ敬老の日の新開を拾い読みいて

念願のナースとなりし孫のプレゼント万歩計つけ歩かな野辺を

彼岸花はさびしがりやか畦道に土手に群なしあかあかと咲く

らっきょう漬おしえ給いし姑のふみ形見となりしその変体がな

何もかも忘れてしまう恐れもちおぼつかなき手に鶴折る秋夜

（平成五年九月）

気力

不覚にも石につまずき転(まろ)びたる刹那の出来ごと手首骨折

右手(めて)骨折きょうの日記をようやくに左手(ゆんで)つたなき文字に書き終う

ギブス重き手を吊るわれの影法師地の面にしるく秋日はうつす

腫れひかず熱もつ右手もてあます薄暮の庭に虫の鳴き出づ

窓越しの光に生きて咲きつげるセントポーリアわが病む日々を

整形外科は戦争ありて進歩すとかなしき現実医師は云いたり

病む手吊り左手に家事なすこともややなれて気力の立直りゆく

（平成五年十月）

硬　直

荒るるにまかすほかなき庭に咲きいでて病む身に清し八つ手の花は

利き手病み赤き皮ごと丸かじる林檎に老の歯形つけつつ

ようやくにギブス取れしが意のままに動かぬ右手血は通えども

硬直のわが手を治す医師の手の一指一指にこめゆく力

筆圧はあわき影もち身障者の友の思いのこもりたる文

潮騒のごと遠街の音ひびきわが住む丘は昏れゆかんとす

家路いそぐ足音たえし崖下の道にとっぷり闇が来ている

（平成五年十一月）

極　月

在るがまま芽ぶき花咲きすがれゆく千草かたみに寄りそいながら

露霜にひかりいし巣も蜘蛛もなし昨夜（よべ）の凩さらいゆきたる

わが庭にさえずり遊ぶ四十雀とわれに無心の時のありたり

歳末のウインドーにはや雛飾る　いくさなき国の幸せな子ら

一肢病みつくづく思う人のかたち　神の創りし全き五体

硬直の手によみがえる力あり恩寵としてつつしみ生きん

極月の深夜おもえば足元を見ずに駆け来し歳月ありき

（平成五年十二月）